

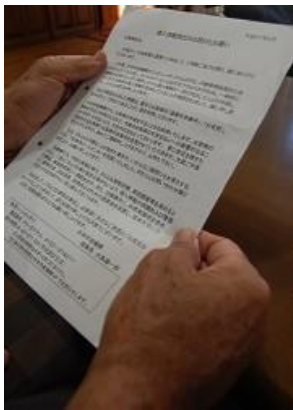


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2505 号 2015.6.22 発行

年金機構：情報保護点検後に流出...評価書、監督機関も承認



毎日新聞 2015年06月21日
日本年金機構から送られてきた通知文を手にする沖縄県内の男性＝川上珠実撮影

日本年金機構が来年1月のマイナンバー制度導入を前提に昨年末から実施した個人情報漏えい対策の自己点検で、「十分な措置を講じている」と評価していたことが分かった。それなのに加入者情報の流出が起きており、点検の妥当性が問われるだけでなく、マイナンバー制度の信頼性も揺らぐ可能性がある。【日下部聡】

◇マイナンバー、揺らぐ信頼性

マイナンバー制度は日本に住む全ての人に番号を割り当て、税や社会保障に関する情報と結びつける。今回流出した基礎年金番号もマイナンバーにひも付けられる予定。

年金機構が実施した自己点検は、マイナンバー法に基づく「特定個人情報保護評価」。厚生労働省と共同で昨年12月～今年2月に点検し、結果をまとめた評価書が3月、マイナンバー制度を監督する第三者機関「特定個人情報保護委員会」に承認され、同委のウェブサイトで公表された。

評価書は「特定個人情報の漏えいやその他の事態を発生させるリスクを軽減させるために十分な措置を講じている」と「宣言」している。これについて年金機構は「マイナンバー導入後の業務への評価が中心で今回の流出と直接の関係はない」（刷新プロジェクト推進室）と説明する。

ただ、評価項目には「技術的対策」「事故発生時手順の策定・周知」「従業者に対する教育・啓発」など、現行の漏えい対策も含まれていた。評価書は技術的対策として「ウイルスなどの駆除または隔離を行うソフトウェアを導入している」、職員教育では「毎年度研修の受講を義務づけている」と記載する。しかし、職員が標的型メールの添付ファイルを開いてシステムがウイルス感染し、新型ウイルスを検知できず対応が遅れ、大量の情報流出を招いた。

一方、特定個人情報保護委は評価書を承認する際、年金機構と厚労省の担当者から聞き取り調査をしていたが、議事概要によると、委員の質問はマイナンバーの扱いが主で、ウイルス対策などへの言及はなかった。聞き取りは1回だけで、評価書について委員から「確実に実行してもらいたい」との発言があったという。

特定個人情報保護委は、公正取引委員会のような内閣府設置法に基づく組織。委員長1人と委員6人（年内は4人）の人事は国会の同意が必要で、任期は5年。評価書に反した機関に対して、勧告や命令などを出す権限を持つ。情報流出について同委事務局は「マイナンバーに影響があると分かれば、何らかの対応を取ることはあり得る」としている。

内閣官房でマイナンバー制度を担当する向井治紀審議官は取材に「特定個人情報保護評価の目的は、評価書の公表によって公的機関に責任を負ってもらうこと。公的機関は信頼

できるという前提での仕組みだが、同じトラブルが起きれば、制度変更が必要になるかもしれない」と話した。

◇特定個人情報保護評価◇

行政など公的機関がマイナンバーを扱う前に情報漏えい対策などを自己点検し、結果を公表して安全を宣言する制度。多数のデータを扱う機関は、特定個人情報保護委員会に評価書の承認を受けなければならない。欧米諸国を中心に行われている「プライバシー影響評価」(PIA)がモデルで、政府は国民の不安を解消する仕組みと位置づけている。「特定個人情報」はマイナンバーを含んだ個人情報のことを指す。

【強制不妊手術】「私の体を返して」 人生変えた半世紀前の体験

共同通信 2015年6月21日

半世紀前の体験が、その後の人生に重くのしかかった。「私の体を返してほしい」。旧優生保護法に基づき不妊手術を受けさせられたとして、人権救済の申し立てに踏み切ることになった宮城県の60代の女性は訴える。

県内の山村で、7人きょうだいの長女として育った。女性の話によると、中学3年の時、知能検査の結果を基に知的障害者のための福祉施設に入所させられた。卒業と同時に職業訓練のため「職親」の家に住み込みで家事をするようになった。

「出かけるから、ついておいで」。ある日、そう声を掛けられ外出。公園でおにぎりを食べた後、橋を渡った所にある診療所に連れて行かれた。

そこには久しぶりに見る父の姿があった。医師に何をされたのかは分からないままだった。

その後、自宅で暮らすようになって両親の会話を偶然聞き、自分が不妊手術を受けさせられたことを知った。

父が東京で就職先を見つけてくれ、上京。町工場でミシンがけをしたが体調不良で長続きせず、事務や飲食店の仕事を転々とした。

不妊手術のことがいつも心の重荷だった。「子どもを産める体になりたい」と医師にも相談したが、悩みが解決することはなかった。

後年、父からの手紙に不妊手術の経緯が書かれていた。「至急手術するよう話があったので、印鑑を押せと責められてやむなく押した」

女性は1990年代になり、旧優生保護法の非人道性を訴える市民グループとともに、国に真相究明を求める活動をするようになった。

手術の痕は今も体に残る。なぜ自分は手術を受けさせられたのか。今も、その答えを探し続けている。(共同通信)

「気付き」がきっかけ 映画「きみはいい子」 監督 呉 美保 大阪日日新聞 2015年6月21日



ほんの一步だけでも

「自分が子どもを産んでどう変わるか...」と話す呉美保監督＝大阪市内のホテル

「きみはいい子」の高良健吾(左)
＝(C)2015 アークエンタテインメント

中脇初枝の第28回坪田譲治文学賞の同名小説を、昨年「そのみにて光輝く」で高



い評価を受けた呉美保監督が映画化した「きみはいい子」(アークエンタテインメント配給)

が27日から、テアトル梅田で公開される。いじめ、虐待などの社会問題を扱って「人と人のつながり」を問いたいという呉監督に話を聞いた。

■家族の幸せ

－これまでずっと家族をテーマにしてきている。

「酒井家のしあわせ」「オカンの嫁入り」はそれぞれ一つの家族の物語で、その幸せとは何かについて問うてきた。「そのみにてー」では同時に男と女の突き詰めたテーマも重ねた。今度は、一つの町の中の「いくつかの家族」の物語で、私にとって作品の幅を広げるチャンスだった。

－ある町の学校と先生と父母、子どもたちの日常が描かれる。

原作は5編のオムニバスで、その中から「サンタさんの来ない家」「べっぴんさん」「こんにちは、さようなら」の3編を選んで、「そのみにてー」でも組んだ高田亮さんに脚本を書いてもらった。いじめ、虐待、認知症、自閉症、学級崩壊、ネグレクト（育児放棄）など、いま社会問題になっているテーマがみんな入っている。

－若い小学校教師・岡野（高良健吾）がその中心にいる。

どこにでもある町の話にしたいと、岡野は優柔不断で、何かぶつぶついいながら仕事をしている普通の教師にした。しかし、担任の学級で起きるいじめなどを通して、モンスター・ペアレンツに巻き込まれ窮地に陥り、闘わなければならなくなる。それまで見えなかったものが「見える」ようになる過程を描きたかった。

■優しさの連鎖

－彼は少しずつたくましくなっていく。

岡野は家で同居する出戻りの姉（内田慈）にももらったヒントで、人に優しくすると、その人がまた別の人に優しくする連鎖が起こるのだと思う。やがて彼はクラスの男の子が虐待を受けているのではないかと疑い、その子の家を訪ねる。そこから彼の第1弾の闘いが始まる。

－3歳の娘と暮らす母・雅美（尾野真千子）の虐待はつらい。

夫が海外出張で娘と2人暮らし。何かあると娘にあたるように暴力を振るう。彼女自身、昔母親に虐待された経験がある。雅美のママ友の陽子（池脇千鶴）がある時、「つらかったでしょう」と声をかける。陽子も同じ体験があったからそれを察した。つまり、誰かが「気付く」ことが大事。

－認知症のあきこ（喜多道枝）と自閉症の男の子・弘也（加部亜門）の話もいい。

弘也は1人暮らしで、あきこの家の前を通る時いつも「こんにちは、さようなら」とあいさつする。ある時、弘也があきこの家の前でかばんの中身をひっくり返し自分の家のカギがないとパニックになるが、あきこが優しく家の中に入れ慰める。弘也の母親・和美（富田靖子）が「迷惑をかけて」と謝りに来ると、あきこは「私の方がいつも世話になっている。こんないい子はいない」と逆に礼を言う。和美は「初めて息子が褒められた」と泣きだす。

－和美はスーパーで働いており、あきこを万引で捕まえたことがある。

あきこが認知症だと分かっているにも、和美は職業がら彼女の行為を責めなければならなかった。ところが今度は息子が迷惑をかけているのに、あきこからわが子が「いい子」と褒められた。「フランダースの犬」で声優もされたベテラン女優の喜多さんがとてもよくて、富田さんもいい味を出してくださった。

－あきこは6月なのに「桜の花びらが家に入ってきた」という。

彼女にはそれが「花びら」に見えた。現実に見えているものだけがすべてではない。「あきこにしか見えない桜を表現したい」と思った。でも見せ方次第では映画から浮いてしまうし、ファンタジーで逃げたくなかったので表現方法はいろいろ腐心した。

■尾野&池脇

－虐待する母親・雅美と、その母親に手を差し伸べるママ友・陽子の関係は。

雅美は腹が立って娘に虐待しているわけではない。娘にどう接していいか分からないだ

け。一方の陽子は息子が悪いことをして言葉で怒るけど頭をなでて最後は抱きしめる。雅美はそれが理解できてもまねができない。だから苦しんでいる。すぐに解決しないだろうが、雅美は陽子に手を差し伸べられて「ほんの一步だけでも」前に進んだのではないか。尾野さんと池脇さんは、撮影中、実際に苦しうだった。

オ・ミボ 1977年生まれ。三重県出身。大阪芸大卒業後、大林宣彦監督に師事。短編映画を製作後、自作脚本「酒井家のしあわせ」（2005年）で長編映画監督デビュー。「オカンの嫁入り」（10年）で新藤兼人賞、長編3作目「そのみにて光輝く」（14年）でキネマ旬報ベストワン、モンリオール世界映画祭監督賞など国内外の映画賞を総なめ。今年5月下旬に男の子を初出産。これからどんな視点が加わるか。

<あなたに伝えたい>孫の成長ゆっくり見守って

河北新報 2015年6月21日

息子たちと美恵子さんの思い出を語り合う昭寿さん(右から2人目)、佳奈さん(左)



◎尾形昭寿さん(東松島市) 美恵子さんへ

昭寿さん 母は何をするにも常に家族の中心で、家のことは大体母が決めていました。母は仕事柄、夜勤も多かったのですが、朝起きて家の仕事をしっかりとこなし、夜勤に出ていました。

母を失って生活の中に、ぽっかりと大きな穴が空きました。震災後は家族で何か物事を決める際に、意見がまとまらないことが多くなりました。こんなときに母がいれば、すぐに収めてくれただろうと思います。

私の息子たちは表には出ませんが、寂しい気持ちを持っているようです。ふとしたときに「ばっばが生きていれば良かった」と口にすることがあります。運動会などを見てもらいたかった気持ちがあるのではないのでしょうか。

震災後、息子たちに家事を割り当て長男には料理の手伝い、次男には風呂掃除をさせています。手伝いをするうちに、自分のことだけでなく他人のことも考えられるようになってきました。そんな姿に母も「大きくなったね」と喜んでいることでしょう。

震災で自宅には約1メートルの津波が押し寄せました。修繕して暮らしていましたが、古くなったので現在建て替え中です。新居での暮らしは、ことし中にスタートできる予定です。

母には、息子たちが新しい家でけがをしないように、成長を見守ってもらいたいです。今まで家のことも仕事も一生懸命にやってきましたので、ゆっくり休んでももらいたいですね。

◎家族の大黒柱だった「ばっば」

尾形美恵子さん＝当時(57)＝東松島市宮戸で両親と夫貞男さん(63)、次男昭寿さん(34)、昭寿さんの妻佳奈さん(37)と3人の孫の9人で暮らしていた。震災発生後、自宅から勤め先の東名地区の高齢者福祉施設へ。車に物資を積み、入所者が避難する野蒜小へ向かう途中に津波にのまれたとみられる。

高校生介護技術コンテスト 7校14人、技術競う

佐賀新聞 2015年06月21日

左半身にまひのある要介護者役の生徒の体を支え、丁寧に移動介助を行う出場選手＝佐賀市の北陵高



第5回県高校生介護技術コンテスト(県高校教育研究会福祉部会主催)が20日、佐賀市の北陵高で開かれた。介護福祉を学ぶ県内7校の代表者14人が出場し、学習で培った知識・技術の成果を披露した。

各校2人1組で参加。7分以内に、左半身不随の高齢女性をトイレから居室へ誘導し、水分補給の後、ベッド

で横になるまでを介助するという課題で競い合った。

出場選手は女性の自立支援を考慮して、右半身でできる簡単な動作を促したり、「今週は家族が面会に訪れなかった」という設定の女性を気遣って、明るい話題でコミュニケーションを図るなど、それぞれ工夫を凝らして介助した。

質疑応答を含む全15項目で審査した結果、最優秀賞には嬉野高総合学科社会福祉系列3年の山口玲奈さん(17)、松尾渚さん(18)ペアが選ばれた。2人は「緊張したけど、頑張っただけ練習したので自信を持って挑めた。水分補給でむせずに飲めるよう、発声やストレッチを行ったりと工夫も盛り込めた」と話した。

2人は県代表として、8月25日に大分県で行われる九州地区大会に出場する。

「ピップ」が鳥栖市社協に ロボットと車いす寄贈 佐賀新聞 2015年06月21日



ロボットと車いすを寄贈したピップの木村貴紀九州支店長(左)と鳥栖市社協の小石正明会長=鳥栖市社会福祉会館

鳥栖市に九州支店を構える健康・医療用品メーカー「ピップ」(大阪市)は17日、鳥栖市社会福祉協議会に高齢者向けのコミュニケーション型ロボット2体と車いす2台を贈った。

ロボットは同社が開発した「うなずきかぼちゃん」。5種類のセンサーを内蔵し、さわったり話しかけたりすると、400種類の言葉を発する。高齢者の認知機能向上や癒やし効果が期待できるという。

贈呈式では、同社の木村貴紀九州支店長が「温かなまちづくりに少しでも貢献できれば」とあいさつ。社協の小石正明会長が「ロボットは地域の食事会で紹介し、車いすは無償で貸し出します」とお礼を述べた。

同グループは2005年以降、全国各地の社協に計465台の車いすを贈っており、鳥栖市社協への寄贈は4年連続。ロボットは今回初めて贈った。

認知症お年寄りの接し方知って 伊賀の小学校で講座 中日新聞 2015年6月21日



保健師らの認知症の寸劇に見入る小学6年生たち=伊賀市沖の依那古小学校で

伊賀市依那古(いなこ)小学校で二十日、市地域包括支援センターの保健師らが認知症を題材にした寸劇を演じ、六年生十八人が、こうしたお年寄りにどう接したらいいのかを考えた。高齢化社会を迎え「六十五歳以上の七人に一人が認知症にかかっている」といわれる中、市が子ども向けに始めた「認知症ジュニアサポーター養成講座」の初回。来年三月末までに小学五年生～中学一年生

を対象に十校ほどで講座を開きたいという。

「道に迷い、部屋用のスリッパをはいて公園を歩いているおばあさんがいたら、どうする」。こんな設定で、保健師の服部恵子さん(53)ら三人が演じた。ランドセルを背負った小学生役の二人が無視して通り過ぎたり、やさしく声を掛けたり。おばあさん役が居間で「どこへ行くの」と、何度も孫に聞き返す劇も演じ、児童たちは真剣な表情で見入った。

講師は、センターの保健師や社会福祉士ら八人。センターは市役所本庁(上野丸之内)、いがまち保健福祉センター(愛田)、青山保健センター(阿保)に拠点がある。連絡を取り合い、子ども向け講座のメニューを考えた。講座開催に当たり、新たな市の予算は必要なく、普段からお年寄りの支援を仕事にしている職員たちのマンパワーを活用した。

講座では、保健師らが「いま何時かや、どこにいるかが分からなくなる」といった認知症の人の症状も説明。しかし『『うれしい』『悲しい』『孫を大切にしたい』という心は生きている』と話した。

児童たちは「私たちができること」について話し合っ発表。「やさしく対応する」「大人の人を呼ぶ」「交番に連れて行ってあげる」などと述べた。山口愛斗（まなと）君（12）は『『認知症』という言葉は知っていたが、講座で詳しく分かった』と話した。

市内では大人向けの認知症サポーター養成講座が開かれ、これまで三千六百人余が受講している。子ども向け講座も続け、センターの横尾智子所長（54）は「子どもたちに理解を深めてもらい、お年寄りにやさしく接することが、自然にできるようにしたい」と意気込む。（酒井直樹）

「介護する人」 支援考えるシンポジウム

NHKニュース 2015年6月21日

介護疲れによる殺人事件をテーマに、「介護する側の人」をどう支えていくかを考えるシンポジウムが、東京都内で開かれました。

これは、都内の市民団体が開いたもので、家族を介護している人など130人が参加しました。

最初に、日本福祉大学の湯原悦子准教授が講演を行い、介護疲れが原因とみられる親族間の殺人事件が去年までの17年間に672件に上るという独自の調査結果を報告しました。

湯原准教授は、さらに、「加害者は、“夫”と“息子”がそれぞれ3割以上を占めている」と指摘したうえで、事件が相次ぐ背景には、介護をする人が孤立しがちでうつ状態に陥りやすい現状があると説明しました。

続いて行われたパネルディスカッションでは認知症の母親を介護してきた男性が「毎日の介護に疲れるなか、自分が事件の当事者になるのではないかと恐怖心を抱いたこともある」とみずからの経験を話しました。

また、主催者の市民団体の代表は「悲劇を防ぐためには、介護される人だけでなく、介護をする人も支援の対象と捉え、相談窓口の充実を図り、法整備を進めるべきだ」と訴えました。

参加者の1人で母親を介護してきた女性は、「私たち、介護する側の実情は、まだまだ世間に知られていないと感じる。もっと知ってほしいと思います」と話していました。

“父の日”が消える！？

NHKおはよう日本 2015年6月19日



阿部「“父の日”についてです。」

和久田「今年（2015年）は明後日、21日の日曜日が“父の日”です。“父の日”と言えば、学校で父親の似顔絵を描いてプレゼントしたことや、幼稚園や小学校などでの父親参観の経験がある人もいないのでしょうか。」

阿部「しかし今、こうした“父の日”の行事を取りやめる動きが広がっています。その背景に何があるのか、取材しました。」



廃止？継続？ 揺れる“父の日”
園児たち「先生、おはようございます。」



富山市にある「わかば保育園」です。40年以上前から、地域の子どもを預かってきました。0歳から6歳まで、およそ180人の園児が通っています。

園ではこれまで父の日の行事を行ってきましたが、ここ数年、継続をめぐって議論してきました。園児のおよそ1割が、ひとり親の家庭という状態が続いているからです。



わかば保育園 小島貴子園長「友達の家庭とはちょっと違うと感じ取れたりすると、寂しい顔をしてたりする時もあった。そういう表情を見ていると、本当にいい活動なのかどう



か疑問。」

園では今年から、ひとり親の家庭に配慮して、父の日の行事を取りやめることを決めました。代わりに、家族全員に感謝する日として、「父の日」と「母の日」をあわせた「ファミリーデー」を5月末に設けました。

わかば保育園 小島貴子園長「家族のあり方がさまざまに変わってきているというところからも、父の日、母の日と活動するのではなくて、家族を大事にしていく方向でやっていきたい。」



父の日の取りやめについて、父親たちは…。父親「大変な時代になったと思うが、これはしかたないのではないか。いま、こういうふうな流れになっている。」

父親「それはちょっと悲しいこと。(父の日)一日く



らいは。パパとママどっちが好きと言ったら、“ママ”とすぐに言う。」

全国的に広がる父の日の行事を取りやめる動き。背景にあるのは、離婚などによる“ひとり親家庭”の増加です。その数は15年前に比べ、およそ1.4倍になっています。



一方で、父の日の行事の継続を決めた保育園もあります。全国でも離婚率の高い高知市。ほとんどの保育園で、父の日の行事は廃止されています。そうした中で、あえて父の日を続けている「十津（とおず）保育園」です。

先生「父の日には、バラの花を贈る習慣があります。」



配慮しました。

園児「貼れた、自分の写真。」

父の日の継続を決めた園長の森本佐和（もりもと・さわ）さんです。

父親や母親がいなくても、ありのままの家庭環境を受け入れ、強く育ってほしいと考えました。

十津保育園 森本佐和園長「1人でも頑張っているお母さん、お父さんがいるということ



を、みんなに分かってもらいたい。感謝の気持ちを持ってもらいたい。」

“父の日”がつなぐ母子の絆

父の日の行事をきっかけに、家族の絆を見つめ直



した親子がいます。永野怜司（ながの・れいじ）さんと母親の里奈（りな）さんです。4年前に離婚して、シングルマザーとなった里奈さん。必死に育児にあたってきましたが、ひとり親で寂しい思いをさせているのではないかと、負い目を感じていました。そんな時、去年（2014年）の父の日に、怜司くんからプレゼントをもらいま



母 里奈さん「父の日ということで、おじいちゃんを描くと思ったが、私の顔を描いてくれたのは、本人が私にあげたいという思いがあったのかなと。」

「お母さんのこと好き？」

永野怜司くん「優しい。」

里奈さんは、感謝の気持ちを表してくれた息子に成長の跡を感じました。そして、それに気づかせてくれた父の日を前向きに捉えるようになりました。



母 里奈さん「父の日をやめて欲しいと思っている家庭もあるかもしれないので、一概には言えないが、私自身は個別の配慮はなくても大丈夫だし、改めてこうやって（息子から）もらうことでうれしいし、また頑張ろうと思うようになる。」

廃止? 継続? 揺れる“父の日”



教育評論家の尾木直樹さんは、家庭環境などすべてを受け入れたうえで、父の日を子どもの成長を見つめる機会と捉えてはどうかと、提案します。

教育評論家 尾木直樹さん「一番の主演は子どもたち。感謝を示したいとか、お父さんのことをもう一回考えたい、考えを深めていきたいと思うのは、父の日が大事だというより、父の日というものをきっかけにして、父の存在とか家族の関係とか母への感謝とかを考

てみようということであって、何でもきっかけだと思う。」

和久田「子どもたちが大切な家族に感謝する日として、父の日の意味も変わってきているんですね。」

阿部「教育評論家の尾木さんは、父の日の行事を継続するにしても中止するにしても、簡単に結論を出すのではなく、何が子どもたちのためになるのか、保護者も交えて話し合うことが大切だと指摘していました。」

